小国町

郡長の名前をとった「井の下堰」

今から400年ほど前、上杉氏が置賜地方をおさめていたころ、小国町増岡の周辺は、宮田川という小さな川を流れる、わずかな水で田んぼを作っておりました。あれ果てた土地を田んぼにするにも水がないため、農民たちの生活はたいへん苦しいものでした。

その当時、小国の町をおさめるためにやってきた、代官の笹生源右工門とその子供である笹生久兵衛は、横川と荒川の合流地点で、平地が広がっているこの土地を田んぼにできないか毎日考えておりました。しかし、川よりも高い土地に水を引くことは簡単にできることではありません。

昔の水路を作るところ 〔白川土地改良区所蔵〕

そこで、荒川に流れる金目川から水を引くことを考えだしたのでした。大きな建設機械がない当時の技術では、水路を作ることは大変なことでした。土地の高さをはかる道具などがなかったので、夜中にたくさんの村人たちが、ちょうちんやたいまつを持ち、反対側の山から明かりを頼りに、高さをはかり、全て人の力で6kmもある増岡堰という用水路を掘ったのでした。それからの村人たちは、あれた土地を田んぼとして耕し、たくさんの米を作ることができ、暮らしもしだいに豊かになっていったのでした。

月日が流れ、どんどんと田んぼを広げていったために、増岡堰の水が足

今の井の下堰取入れ口

りなくなってきたのでした。村人たちは「もっとたくさんの水があれば、さらに田んぼを広げ、たくさんの米が取れるようになるのだが…」と話ししていた、1918年（大正7年）のことです。増岡地区の小関熊之助が、村人たちの願いにこたえ、新しい堰をつくり、十分な水が流れるようにしたいと考え、取り入れ口を上流に移す工事を行い、ようやく水を流すことができたのでした。

しかし、大宮地区と増岡地区の間では、いつも水争いがおこり「水ドロボー」が絶えることがありませんでした。時には、ケガ人が出るほど激しいもので、当時の郡長（現在の町長）であった、井下民雄がケンカを止めに入り、大宮地区にも増岡堰の水を分けてやることで両地区を仲直りさせたことから、増岡堰は「井の下堰」と呼ばれるようになったということです。

コンクリートになった水路

【参考文献　井の下堰の由来について…井の下堰土地改良区】